別府大学
NOV.21.1984
図書館

佐伯史談

第九十四号

「郷土史研究誌」通算第百十六号

昭和四十九年五月廿一日

佐伯史談会

事務所　佐伯市大字稲垣字龍護寺　羽柴方

英治画

佐伯城三の丸櫓門

（文化会館側からのスケッチ）

提言

佐伯城三の丸櫓門の修復

―貴重な文化財の保存愛護を―

佐伯史談会会員
日本城郭研究会員　小野英治

佐伯を代表する木造建築物として広く知られ、佐伯地方の人達に愛され親しまれている佐伯城三ノ丸の櫓門も、近年老朽化による破損が目につき始めました。

この事について、去る三月二十八日付朝日新聞大分版で、大きく写真入りでとりあげられましたから、ご存知の方も多いと思いますが、特に屋根部にそれが著しく、早急な修理

本号の内容

提言　佐伯三の丸櫓門の修復（小野）…一
―貴重な文化財の保存愛護を―
随想　佐伯氏と元冠（佐脇貫一）…三
研究　佐伯方言雑話（山内武麒）…九
研究　中世の鄙の大漁（安部弥右エ門）…九
―中浦門での漁の歴史をたどる―
研究　みかん雑話（小野武夫）…一三
―その伝来の歴史をたどる―
紹介　黒沢の東光庵（山崎作一）…一五
◇大政短信　（長谷川哥）…二六
研究　横山先生と佐伯（山本保）…一七
紀行　再び伊豆路に（富沢泰）…二一
◇佐伯市史の紹介・ほか……二五
◇集会・おしらせ　など

が望まれています。

幸いなことに、最近地元有志の方々により、三ノ丸櫓門保存会が結成され、これの修理保存の運動が起こされたことは、実によろこばしいことです。

ではこの櫓門は、ただ単に古いという以外に、どのような特色、どのような価値があるのでしょうか。その詳細については、すでに「豊後佐伯城の研究」の中で（佐伯史談第十四号）発表していますので、ここでは省略いたしますが、この櫓門の保存の意義を申しますと、城郭建築としての希少価値、その構造上からの歴史的・芸術的・文化的価値、そして一般市民に古くからなじみ親しまれた建物としての価値などがあげられると思います。

特に希少価値からしますと、全国的にも城郭の櫓門として現存する例は二十城程あるに過ぎませんし、九州では熊本城（不明門）、平戸城、佐賀城（シャチの門）、それとこの佐伯城（三ノ丸櫓門）の四城だけであり、もちろん大分県下では佐伯城のみです。

歴史的にも、寛永十四年（一六三七）、山頂本丸から三ノ丸へ城館を移した時期に造営された、記念すべき建物です。もちろん、享保、天保年間に修理工事（註、櫓門内の木札に再造という記入があるが、その規模構造は創築時のままと考察されるので修理とした）がなされましたが、寛永十四年創築当時の形態を、そのまま踏襲再現して現在に至った、いうなれば江戸初期の最も築城技術の進歩した時期に於ける、城郭建築の化石ともいえるものです。

なぜ修理に際して、その当時に合った形に改造しなかったのかというと、それは徳川幕府の厳しい干渉があったことが大きく影響しています。ですから下見板張という、武骨で質素な古色を残して今日に至っているのです。

特に古式を残す点として、櫓部の両妻に出入口を設け、石垣から石垣へ渡した渡櫓門で、堅固と実戦向きに作られた、最盛期城郭建築の特色があり、加えて石落しと考えられる櫓部の出張り、木部を露出した出格子窓等があげられます。　反面後世の修理の際に於ける、後補と思われる点に、門扉は堅固というより美観を重視し、筋鉄張り、鉄張りはなく、ケヤキの一枚板を使用していること、狭間、銃眼の消滅している点などがあります。

次に意匠、芸術的には、前後に切妻の庇屋根を、それも外側と内側とでは高さを異にするという手法で、そして出格子窓についても外側と内側とは、長さを異にするなど、質素な中にも変化をもたせて成功した例といえます。

さらに、梁行二間、桁行五間という小規模ながら、当時の佐伯地方に於ける最高技術者を動員して建築した、江戸時代初期に於ける小藩の居城にふさわしい城門の見本として、文化財としての価値は高いものといえるでしょう。

櫓台石垣にしても、佐伯城現存石垣中最大のものを使用しているということも、この櫓門の重厚さを、一段と増し注目すべきことです。

このような重要な文化財が、今日まで殆んど放置された状態にあったことは、不思議でさえあります。早急に修理復旧を図り、文化財に指定し、後世に伝えなければなりません。

最後に、この三ノ丸櫓門の概容を、秋山家文書ならびに櫓門内の木札によって、まとめてみました。

名称　三ノ丸櫓門

位置　大分県佐伯市三ノ丸

所有管理者　毛利家（現当主　毛利高標氏＝東京都三鷹市居住）
創改築年代　寛永十四年（一六三七）創築
　　享保十一年（一七二六）修築
　　天保三年（一八三二）修築
構造・型式　楼門（複楼門）
　　下見板張　両平出格子　切妻庇付
　　両妻引戸出入口付　屋根本瓦葺
規模　梁行　四・三四㍍（二間）
　　桁行　九・九六㍍（五間）
　　総高　八㍍
　　門部高　二・八㍍

（以上）

随想

佐伯氏と元寇

（私の歴史散歩）

会員　佐伯　勝貫

すでにご存知の方も多いように、私は長男が福岡市に居住しているため、しばしば福岡市を訪れ、その都度、ひまにまかせて長男の住んでいる香椎・箱崎地区の史跡旧跡を尋ねまわっている。

私の願いは、古代の奴の国（なのくに）、儺の県（なのあがた）であるといわれている那の津（博多の津）は、遠の朝廷（とおのみかど）といわれた大宰府の外港として、九州ではもっとも早くひらけた土地であるから、豊後の国とも深い関連があるはずだし、また豊後の一辺域である佐伯地方とも、何らかの歴史的なつながりがあるだろう。その片鱗でもよいから見つけたいものだということであった。

某日、箱崎松原付近を散策しているとき、九州大学農学部前で、元寇防塁跡と刻まれた碑を見た。そこは多々良川の支流宇美川にほど近い地点である。防塁跡で有名なのは、福岡市西区の百道海岸に近い、修猷館高校内にある石築地跡や、生の松原、今津海岸に残っている防塁跡であるが、箱崎のものは西鉄沿線の堤防といった土塁跡である。

文献によると、元寇の防塁は今津の海岸から、香椎にいたる約十四キロメートルにわたって築かれていたといわれ（一説には宗像、津屋崎まで延長されていたという）この高さ約二メートル、底の幅約三メートルの大石築地は、九州各地のご家人。非ご家人を総動員して、それぞれに分担地域を割当て構築したと伝えられている。そして筑前・筑後は博多の海岸、日向・大隅は今津・長浜というように分担がわかっていたが、豊後大友氏の分担した地域はわからなかった。ところが昭和三十四年、杵築市生桑寺の大般若経の裏打ち紙に使われた古文書に、豊後の石塁分担地が記入されていることがわかった。つまり豊後大友氏がその領内のご家人をひきいて構築した防塁は香椎前浜であって、当時大友頼泰の本陣は香椎宮に置かれたというのである。

その後私は、再三にわたって香椎宮に詣で、香椎宮を中心にした地域に、防塁遺址と思われるものはないかと探して見た。

元寇の防塁は箱崎松原で、当時の多々良浜（多々良川と宇美川の合流点、松島という中洲がある）に臨み、多